芹霊と
１００人の元カレ
１

芹霊と１００人の元カレ　１

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=20128803

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, 芹霊, エク霊(別れています), ♡喘ぎ

芹霊前提、師匠総受けです。エク霊（別れています）が含まれます。今回は♡喘ぎがあります。倫理がアレです

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

ネタバレ
芹霊は別れません

芹霊と１００人の元カレ　１

このお話は、１００人の男に捨てられた師匠と、真っ直ぐな芹沢さんが、元カレたちを乗り越えて幸せな未来を掴むお話です。

※

「はー……」
霊幻がため息を吐きながら鞄を仕事机に置く。
芹沢はその顔を見てぎょっとした。
「また、彼氏と別れたんですか」
「まあなー」
思いっきり泣き腫らした顔。痛々しいほどだ。
霊幻は裏では有名なビッチで、誰とでも寝るし、男を切らしたことがない。と芹沢は聞いている。
でも別れにダメージを受けないかと言うと、違うらしいというのは最近分かってきた。
働き出したばかりの時は定期的に顔を腫らしてくる霊幻を不思議に思っていたが、どうやら恋人と別れるたびに一晩泣き明かしてくるらしい。
（ビッチで尻軽なら、俺にもチャンスがあるかも――）
芹沢は乾いた喉に唾を無理矢理流し込む。
「あのッ、霊幻さん！」
「おお、どした」
「良かったら俺と付き合ってもらえませんか！？」
ぱちくり、と一度霊幻はまばたきして。
「いいよ」
嬉しそうにはにかんだ。
――そうして２人の交際はスタートしたのだった。

※

芹沢と霊幻は向かい合ってラーメンを食べる。
いつもと変わらない光景だが、『恋人』と食事をしているのだと思うと、芹沢はほわほわと幸せになってくるのだった。
「どうしたんだよ、にやにやして」
「いや、はは、しあわせだなあって」
照れて頬をかく芹沢に、柔らかく霊幻は笑う。
「そっか。俺も幸せだよ」
「へへ……」
じんじんと痺れるような昂揚感を感じながら、芹沢はラーメンをすすった。

「じゃあ、また明日」
いつもの分かれ道で、霊幻はひらっと手を振る。
「あ、のっ」
芹沢は何故だかとてつもなく寂しくなって、霊幻を引き留めた。
「なんだ？」
「よ、かったら、」
ぎゅ、と芹沢は霊幻の服の裾をつかむ。
「俺の部屋……来ませんか」
それには何も下心は無かったのだけれども。
「………………シたい？」
霊幻からそう訊かれて、芹沢は小さく頷いてしまった。
「そっか。じゃあコンドーム買いに行こうぜ」
くる、と振り返った霊幻の表情を、いまだに芹沢は思い出せない。
（ヤれる）
よこしまなことで頭がいっぱいだったから。
霊幻がコンビニでゴムだけを買って、迷いなく芹沢のアパートに向かう。
「準備するから、トイレ貸して」
ぱたん、とトイレのドアが閉まったら、
芹沢の股間に一気に血が集まった。
ドッ、ドッ、ドッ、と心臓が耳の横にあるかのように自分の鼓動で

聞こえなくなる。
「おまたせ。……もうガチガチじゃん」
気怠げにトイレから出てきた霊幻が芹沢のテントを見てくすっと笑う。
「スーツ脱がすな」
「あ、はい！」
するすると慣れた手つきで霊幻は芹沢のスーツを脱がせていき、ハンガーにかける。
「裸見れた方がいい？どうする？」
「み、見たいですッ！」
またくすっと笑って霊幻は服を脱いでいく。
「そんないいもんじゃねえぞ。ハンガー借りるな」
霊幻はさっと服を脱いで裸になった。
（霊幻さんの裸……ッ！し、白いっ！乳首ピンクっ！エロい……っ！）
「芹沢、ベッド座って」
とん、と肩を押されて、芹沢は身体の力が抜けたかのようにベッドに座り込む。
「わ、大きい」
下着をずらしてブルン♡と飛び出した芹沢の怒張を、うっとりと霊幻は眺めた。
「んッ♡」
ぱく、と霊幻がペニスを咥えて、芹沢は慌てる。
そんなことはしなくていい、という言葉を口にさせてもらえず、快楽に流されていく。
じゅる♡、ずぽ♡、ちゅぱっ♡っと耳からも水音で犯された。
「はあっ……霊幻さん、もうッ」
びゅるる、と出した精液を、霊幻は口を開いて芹沢に見せつける。
「あっ、」
ティッシュ、と慌てた芹沢の目の前で、ごくんと精液を飲み込んだ。
じわ、と芹沢の胸に罪悪感が広がる。
「れいげんさ──」

「すっげぇ、まだガチガチじゃん」
けたけたと笑いながら霊幻はそっと芹沢を押し倒し、馬乗りになる。
「あ、あの、その、」
霊幻はくるくると芹沢の性器にゴムを付け、ず、と挿入を始めた。
じわ、と芹沢の心にモヤモヤが広がっていく。
「あ……っ♡おくまでとどくぅ……♡」
「う……ッ、くぅ……っ」
ぱじゅぱじゅと騎乗位で腰を振られて、芹沢はあっという間に追い詰められた。
「あッッ♡イっくぅっ♡♡♡」
芹沢が精を吐き出すと同時に、霊幻もビクンと身体を跳ねさせた。
「は、……ッ」
射精の賢者タイムで芹沢は呆然とする。
「汗かいたろ。風呂入ってこいよ」
ぱぱっとゴムを処理した霊幻がティッシュで芹沢のペニスをぬぐいながら笑いかける。
「あ、はい」
芹沢は反射的に霊幻の言葉に従った。

シャワーを浴びながら。

（霊幻さん、イって無かったよな……）
芹沢は自己嫌悪にさいなまれていた。
「あの、霊幻さん……あれ」
シャワーから出たら、霊幻の姿は消えていた。
郵便受けには、部屋の鍵に付箋が貼られて投函されていた。

『勝手に使ってごめん』

「……」

芹沢はその付箋をゴミ箱に一度捨てかけたが、やめてそっと手帳に

貼った。

※

「霊幻さんっ、あの……ッ！」
翌朝。色々と霊幻に言いたいことを頭の中でかき回していた芹沢は、だが霊幻の見たことも無いような幸せそうな笑顔に毒気を抜かれてしまった。
「おはよう、芹沢」
「おはよう、ございます」
霊幻は芹沢に近寄って、髪に触れる。
「ねぐせ」
ふふっと笑う霊幻の、今までとは違う距離感に芹沢の頬が染まった。
（……しあわせだ……）
「あっこら、相談所ではやめろって」
思わず芹沢は霊幻を抱きしめる。
「……もー」
ちょっと困った風に、でも霊幻は抱き返して芹沢の肩に頭を預けた。
しばらく２人の世界に浸っていたら、ガチャっとドアがノックも無しに開いた。
慌てて身体を離そうとしたが間に合わない。
「お、次は芹沢をたぶらかしてんのかァ？」
にやっと笑いながら男性に憑依したエクボが入ってきた。
「なあ、霊幻」
「あっ」
ぐいっとエクボは霊幻を引っ張って自分の腕の中におさめる。
「愛してる──やり直そう」
「やり直しません。オイ離せ」
エクボ渾身の口説き文句を、さらっと霊幻はかわした。
「なんだよ、一昨日のことまだ怒ってんのか？……悪かったよ。もう２度とお前を離したりしないから、戻ってきてくれよ」

「戻りません。だから離せって……！」
身をよじる霊幻にエクボは抱きしめる力を強くする。
ざわ、と芹沢の胸に黒いモノが広がっていく。
「なんだよ、つれねぇなぁ。あんなに愛し合った仲じゃねえか
よ？」
「……っ、『飽きたわ、別れたい』って言ったのお前だろう
が！！」
ダンッ、と革靴で爪先を踏み、掌底で霊幻はエクボを突き飛ばす。
「イってえ！！」
「……もう、これ以上はやめてくれ……」
顔色を白くした霊幻の肩を芹沢が慌てて抱く。
「大丈夫ですか、霊幻さん」
「！……ははあ、なるほどなあ、霊幻。今は芹沢と付き合ってんの
か」
カツ、と靴を鳴らして近づいてくるエクボに芹沢は警戒して手を差
し出す。
「フラれて１日と経たずに次の男を捕まえるとは流石だなァ？この
尻軽が。次はいつ別れるんだ？えぇ？」
ざぁっと芹沢の血の気が引く。そうだ。これまで霊幻はだいたい
３ヶ月で男と別れてきていた。
（俺も３ヶ月で捨てられるんだろうか）
「うるっせー！散々人のことオナホ扱いしてたクズ野郎にそんなこ
と言われる筋合いはねーんだよ！！」
キれた霊幻がエクボにドロップキックをかました。
「捨てたオナホが惜しくなってゴミ漁ってんじゃねーよ脳性器
が！！！！」
「はあ！？そもそも全部オメーが浮気しまくるせいだろーが
よ！！」
「浮気なんてしてねーわ勝手に傷付いてんじゃねー！！！！」
ぎゃいぎゃいとやり合う２人の声が、遠い音のように芹沢の頭の中
で響き渡る。
（それでも、たった３ヶ月でも、）
ぎゅ、と芹沢は唇に力を入れる。

（俺はこの時間を大事にしよう）
ちらりとカレンダーを見る。
今日は１２月３１日。年の瀬だった。
付き合い始めて、２日だ。

※

「すみません、初詣はもう学校の友達と約束してて……」
夜の相談所で芹沢は申し訳無さそうに霊幻に告げる。
「今日の夜も、実家に帰るって言っちゃってて……その、本当にすみません。付き合ったばっかりなのに……」
「いやいいって。なんか気を使わせてごめんな？俺のことは気にしなくていいから」
笑う霊幻に芹沢はモヤっとする。
（一緒に過ごしたかったの俺だけなのかな）
「……お疲れ様でした」

次の日。

「でさ〜っ、クリスマス終わったら別れるって言うんだぜ！？酷くない！？」
「はは……」
初詣の道のり。いつもは笑って聞き流せる年下の友人の恋バナを芹沢は上手く流すことができない。
（あれ）
遠くに見慣れた蜂蜜色の髪が輝いた。
「霊幻さ……」
会えて嬉しい。声をかけようとした芹沢が次の瞬間固まった。
隣には、いつもの男性に憑依したエクボがいたからだ。
（え、え、え、）
ぐわんと目の前が揺らいで、思わず芹沢は立ち止まった。
「どしたんザワちゃん。……うわっ、顔真っ青じゃん！大丈夫！？」

「あ、のさ」
芹沢の口から勝手に言葉が漏れる。
「元カレと初詣行くのって、浮気かな？」
「……はあああ！？ザワちゃんの彼女、元カレと初詣行ったの！？！？」
なんだなんだと他の学友も寄ってくる。
「えっと、まあ、うん」
「いやそんなん真っ黒でしょ！！浮気も浮気、許しちゃ駄目だって！！」
「……だよね……」
でも。
（霊幻さんはビッチなんだ。そんな人と付き合ったんだから、多少の浮気には目を瞑らないと）
でないと。
（捨てられてしまう……）
そうは思っても、ショックが身体に出てしまう。
「ごめん、俺、帰るね……」
「そうしなよ。お大事に〜」
芹沢は実家に戻って部屋に閉じ籠り、布団を頭まで被った。
目を閉じると、エクボと笑い合っていた霊幻の姿が浮かんでしまう。
「霊幻さん……」
つらくて、苦しくて、芹沢は布団の中でスマホのスリープを解除する。
霊幻の番号を表示して、じっとそれを見つめる。
（今電話したら霊幻さん、困るかな）
そろそろホテルに行ったころだろうか。電話には出ないだろうな。……むしろ電話したらセックス中の声を聞かされたりして。そんなことを芹沢は思って、落ち込む。しかし。
（なんで俺が気を遣わないといけないんだ、悪いことしてるのは霊幻さんなのに）
と、思っていたら怒りがふつふつと沸いてくる。
「あっ」

手が当たって、コールしてしまった。
（どうしよう、切っても履歴が残るし、あわわわ）
『……芹沢？どうしたんだ？』
予想に反して霊幻はすぐ電話に出た。
芹沢から電話がかかってきて、嬉しいとはずむ霊幻の声。
それだけで全部許したくなってしまう自分が、芹沢は情けなかった。
「霊幻さん、今どこですか」
『……？居酒屋だよ。調味神社の近くの、一献乾てとこ』
「俺も行っていいですか？」
『なんだ、暇になったのか？来い来い、待ってるぞ〜』
電話を切って、芹沢は飛び起きて上着を引っ掴む。
「克也、また出かけるの？」
「うんッ、」
「そう、いってらっしゃい」
「いってきます！」

一体感情を身体のどこに置いたらいいのか、芹沢には分からない。

ただ、あの人のそばへ。

「いらっしゃいませー！」
「あのッ、連れが、先にッ、」
息を切らして目で蜂蜜色を探す。
「おー芹沢、こっちこっち！」
大きく手を振る霊幻の、
腰にエクボの手が回っていて。
芹沢はきゅっと唇に力を入れてから、
「ッいま行きます！」
つとめて明るく声を出した。
「おしぼりお持ちします〜」
席についた芹沢に店員が営業スマイルを浮かべる。
「芹沢、何飲む？」

ニコニコと上機嫌にメニューを差し出してくる霊幻の髪を、隣に座ったエクボが指で梳く。
「れえげん、……」
こしょこしょと耳打ちされて、くすぐったそうに霊幻が笑った。
（いやだなあ）
「あの、ウーロン茶ください」
芹沢は上着を脱いで座席に置く。
エクボはチラッと芹沢を見て。
「霊幻、こっち見ろ」
「ん？」
エクボにアゴをすくわれて、霊幻は反射的に目を閉じる。
「……ッ！れっ……！」
ぐしゃりとおしぼりを握りつぶして流石に芹沢が叫びそうになった。
「間違えた」
「ふがっ」
が、バチっと目を開いた霊幻がベシッとエクボの鼻っ面を手のひらで押さえた。
「つい癖で……ていうかなんで芹沢が来たのに俺こっちに座ってるんだよ。おかしいだろ」
そう言って霊幻は芹沢のとなりに移動する。
「芹沢、明けましておめでとう。今年もよろしくな」
ふにゃふにゃと好きを全開で微笑む霊幻に、芹沢は手の力が抜けた。
でも。
「あの、霊幻さん」
「んー？」
「元カレと２人きりで出掛けるの、止めてくれませんか」
芹沢は心から溢れる言葉を、止められなかった。
（どうしよう。『お前に関係ないだろ』とか言われたら、その通りだし……）
思わず芹沢は膝に目を落とす。じわっと手汗がにじんだ。
「えっごめん、嫌だった？」

あっけらかんと言われて、芹沢はフリーズした。
「ッ嫌に決まってるじゃないですか！」
きょとんとする霊幻に芹沢は食い気味に迫る。
「悪い悪い、じゃあもうしないって。ごめんなー、俺、元カレが多過ぎて色々感覚が麻痺してて……」
「……もうしないならそれでいいです」
「なんだよ、エクボと出かけたのに妬いたのか？なんてな」
「妬きましたよ」
「えっ」
ボッと霊幻の顔が赤くなる。
「当然でしょう」
「そ、っか。……あー、顔あつ……俺、あんまりヤキモチとか妬かれた事ないから、びっくりした……」
（！？！？！？！？）
芹沢の頭が一瞬宇宙に満たされる。
（ビッチなんて嫉妬されまくりじゃないのか？）
思わずエクボの顔を見て、芹沢は理解する。
エクボの顔には困惑と驚愕が浮かんでいた。
「……言えば止めてくれたのかよ……」
「芹沢、これ美味いから食べて機嫌直せって！ほら、あーん♡……ん？エクボ、何て？」
「何でもねえ」
遠慮したのだ。
霊幻がビッチだから、我慢したのだ。
（罪深いなぁ……）
芹沢は差し出された唐揚げを頬張りながら、とりあえず目の前の幸せを噛み締めた。

※

「じゃあ、また相談所で」
ひらり、と霊幻が手を振って３人は解散する。
しばらく歩いて。

「……何の用？」
芹沢は振り返って声を掛けた。
ついてきていた黒コートの男……エクボがピタっと足を止めた。
「……大人げ無いことをしちまったな、と思ってな」
「ホントだよ」
「霊幻を酔わせてあわよくばホテルに連れ込んで寝盗ろうかと思ったんだが」
「タチ悪っ！？」
「……隣に座った霊幻がさ、もう、俺様のことを好きな目で、見てくれなくなってて、」
「……」
芹沢は黙って続きを促す。
「じわじわと、『ああもう俺様の霊幻じゃなくなったんだな』って理解させられて、」
「……」
「……でもまだ、気持ちの整理がつかねぇよ。一昨日まで俺様のオンナだったんだぜ？エロ本読みながら騎乗位させても文句ひとつ言わなかったのに、」
「最低だね！？」
「抱きしめたら抱きしめ返してくれたのに、ただいまって帰ってきてたのに、当たり前にそこにいたのに──」
エクボは開いた手のひらに目を落とす。
「……今なら、取り返せるのなら夢の島の灰を数えることだって出来るのになあ……」
悪霊は目を閉じて。
「……芹沢、これ、預かっててくれねえか？霊幻には突っ返されたから」
目を開いて、ずいっと拳を突き出す。
芹沢が両手で受け取ると、それは美しいプラチナのリングだった。
「……好きにしてくれていい。俺様には、そいつを捨てることも売ることも出来ないから」
エクボはくるっときびすを返して立ち去っていく。
（指輪に強力な呪がかかってる……）

それには、ありとあらゆる守りの想いがこもっていた。
（Ｅ　ｔｏ　Ａ……）
もう届くことの無いその想いを、そっと芹沢は握り締めた。

※

次の日。
「れーげん♡俺様とやり直そうぜぇ♡♡」
「いや余韻！！！！」
変わらず霊幻に抱きつこうとするエクボを遠ざけながら、芹沢は叫ぶ。
「あの退場する感じはなんだったの！？！？」
「は？俺様霊幻を諦めるなんて一言も言ってないが？」
「メンタル強いね！？！？」
「悪霊だからな」
やいのやいのとやり合う２人の間から逃げて、霊幻は困ったように苦笑した。
後で芹沢のねぐせを直してやろう、と思いながら。

続